

[春]

雪とけて村いっばいの子どもかな

雪国の長い冬がようやく終わり、雪が解け出した。家の中にこもっていた子どもたちがいっせいに外へ出て遊んでいて、村じゅうが子どもたちでいっばいだ。〔季語〕雪とく

大根（だいこ）引き大根で道を教へけり

畑で大根を引き抜いている人に道を尋ねたら、今抜いたばかりの大根で道を指して示してくれた。

〔季語〕大根引き

めでたさも中位（ちゆうくらゐ）なりおらが春

めでたい新年を迎えた。自分にとっては上々吉のめでたさとはいえないが、まずまず中くらいといったところだろう。〔季語〕春

悠然（いうぜん）として山を見る蛙（かへる）かな

一匹の蛙が悠然と、はるかかなたの山を眺めていることだ。〔季語〕蛙

われと来て遊べや親のない雀

親のない子すずめよ、私も親のないさびしさは、おまえと同じだ。こっちへ来て、さあいっしょに遊ぼうじゃないか。〔季語〕雀

雀の子そこのけそこのけお馬が通る

道に遊んでいるすずめの子よ、そこを早くのけよ。お馬が通るからあぶないぞ。〔季語〕雀の子

やせ蛙（がへる）まけるな一茶これにあり

かえるがけんかをしている。やせたカエルよ、がんばれ負けるな。おれ（一茶）がここについているぞ。〔季語〕蛙

鳴く猫に赤ん目をして手まりかな

女の子が鞠（まり）をついている。猫がやって来て、遊んでくれとしきりに鳴いてじゃれつくが、女の子はあかんべえをしてまた鞠つきを続けている。〔季語〕手まり

[夏]

蟻（あり）の道（みち）雲の峰よりつづきけん

夏空の下、黒い蟻が延々と列を作っている。この列はいったいどこから来ているのか。ひょっとしてあの雲の峰から続いているのではないだろうか。〔季語〕雲の峰

涼風（すずかぜ）の曲がりくねつて来たりけり

裏長屋の奥のわが家には、涼風も曲がりくねって、ようやくたどり着くことだ。〔季語〕涼風

ふるさとや寄るもさはるも茨（ばら）の花

故郷の柏原に帰ってきた。しかし、会う人はことごとくトゲのある茨の花のようなもので、誰ひとり自分を暖かく迎えてはくれない。〔季語〕茨の花

大蛍（おほぼたる）ゆらりゆらりと通りけり

大きな源氏蛍が、暗やみの中を大きな弧を描きながらゆらりゆらりと飛んでゆく。〔季語〕蛍

焼け土のほかりほかりや蚤（のみ）さわぐ

火事で焼けたあとの土が、ほかりほかりとまだ熱い。そんな中で、蚤どもが騒ぎまわっているよ。

〔季語〕 蚤

やれ打つな蠅（はへ）が手をすり足をする

それ、蠅を打ち殺してはいけない。よく見ると、手をすり合わせて命乞いをしているではないか。〔季語〕 蠅

〔秋〕

名月をとってくれろと泣く子かな

名月を取ってくれとわが子が泣いてねだる。親として、それにこたえてやれないじれったさ。〔季語〕 名月

名月の御覧（ごらん）の通り屑家（くづや）かな

下界を照らしている八月十五夜の月が御覧のように、わが家はぼろくずのようなみすぼらしいあばら家です。〔季語〕 名月

名月や膳（ぜん）に這（は）ひよる子があらば

今夜は名月だ。死んだあの子が生きていて、膳に這い寄ってくるようであったなら、さぞかし楽しい夜ただだろうに。〔季語〕 名月

けふからは日本の雁（かり）ぞ楽に寝よ

はるばると海を渡ってきた雁よ。今日からは日本の雁だ。安心してゆっくり寝るがよい。〔季語〕 雁

木曾山（きそさん）へ流れ込みけり天の川

天空を流れる天の川は、まるで木曾山に流れ込んでいるかのように見える。〔季語〕 天の川

一人（いちにん）と帳面につく夜寒（よさむ）かな

一人旅で安宿に泊まった。一人旅は宿の者から胡散臭く見られるもの。宿帳に「一人」と書かれて、夜の寒さがいっそう身に沁みる。〔季語〕 夜寒

露（つゆ）の世は露の世ながらさりながら

この世は露のようにはかないものだと思ってはいても、それでもやはりあきらめきれない。この世がうらめしい。（長女のさとが痲瘡で死んだときに詠んだ句）〔季語〕 露

〔冬〕

これがまあ終（つひ）の栖（すみか）か雪五尺

五尺も降り積もった雪にうずもれたこのみすぼらしい家が、自分の生涯を終える最後の住まいとなるのか。何とわびしいことか。〔季語〕 雪

うまさうな雪がふうはりふうはりと

空の上から、うまさうなぼたん雪が、ふうわりふうわりと降ってくるのだ。〔季語〕 雪

ともかくもあなたまかせの年の暮（くれ）

あれこれ考えたところでどうにもならない。この年の暮れも、すべてを仏さまにお任せするよりほかはない。〔季語〕 年の暮

椋鳥（むくどり）と人に呼ばれる寒さかな

故郷の柏原を出てきたものの、あいつはこの寒い冬に、のこのこと出稼ぎに行く、まるで椋鳥などと人が陰口をたたく。寒さがますます身にしみる。〔季語〕 寒さ